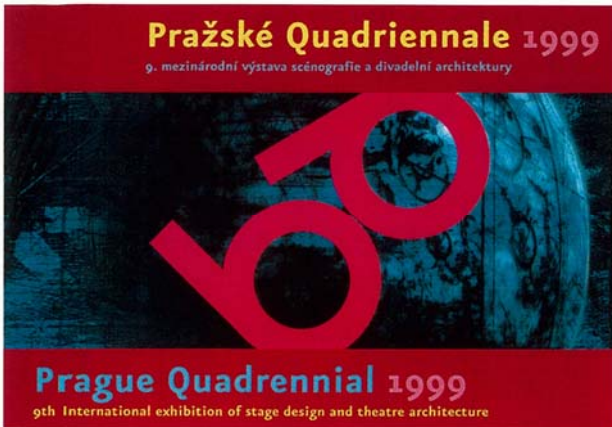


プラハ・カドリエンナーレ Q&A

堀 田 充 規

なお文中での敬称は略させて戴きました。



◆はじめに

1999年6月、舞台芸術学科美術コースは、中欧チェコ共和国の首都プラハにおいて開催された、第9回プラハ・カドリエンナーレの学校部門に2度目の出展参加をした。前回は作品だけを送り、実行委員に展示依頼をしたが、今回は美術コース学生有志とOBを筆者が引率して、現地会場に赴き搬入から展示の飾り付けまでをおこなった。更にチェコ大統領のスピーチに始まるオープニングにも立ち会い、世界各国の舞台美術家、コスチュームデザイナーの仕事、またそれを目指す学生たちの作品を目のあたりにしてきた。

舞台美術とは本来、舞台に飾られ、照明があてられ、演者がそこに立ってはじめて舞台美術の役割を果たす。幕があいて閉じるまでの限定された、時空の芸術とも言える。限定された場所と時間の中でしか存在しないアートであるが、劇場や時間の枠を越え、一同に会して催される国際展がプラハ・カドリエンナーレ、通称PQ。

ここに記すのはPQについてと20世紀最後となった、PQ'99に出展参加した報告である。

Q1 PQとは？

A 正式名称 Prague Quadrennial

世界各国の舞台美術関係者は頭文字を取って通称PQと呼ぶ。サブタイトルは International Exhibition of Stage Design and Theatre Architecture

Q2 プラハ・カドリエンナーレとは？

A 4年ごとにプラハで開催される世界各国の舞台美術家の仕事を中心に衣裳、劇場建築のデザインを集めた重要で、最も名誉ある国際展である。舞台美術、舞台衣裳と劇場建築のデザイン画や模型の他、実物の衣裳など多岐に渡って展示される。

Q3 主催は？

A 第9回のPQの主催は

PQ'99実行委員会、ユネスコ、チェコ共和国文化省、プラハ劇場研究所、OISTAT^{註1}舞台美術委員会ほか、後援代表にチェコ共和国大統領 Václav Havel
ゼネラルコミッショナーは Jaroslav Malina

日本での参加主催団体は日本舞台美術家協会 (JATDT)

因みに大統領は元劇作家である。またゼネラルコミッショナーのマリーナ氏は4年前に来日。我が校を訪問し、稽古中のシェイクスピア「夏の夜の夢」を見学、その美術について筆者も対談している。

Q4 PQの歴史は？

◆PQの沿革について

◇1967年に第1回は開催された。当時、ソ連に次ぐ史上2番目の社会主義共和国チェコスロバキア時代で、東

側で開催される舞台美術、舞台衣裳のデザイン画を中心とした展覧会に参加した国はアルゼンチン/オーストラリア/オーストリア/ブラジル/カナダ/チェコスロバキア/東ドイツ/フィンランド/フランス/西ドイツ/イタリア/日本/メキシコ/オランダ/ポーランド/ソビエト/スイス/チュニジア/ユーゴスラビア/国際展にもかかわらず20ヶ国に止まっている。開催国に距離のある日本とメキシコからはたった一名のエントリーで一作品が届けられたと記録に残っている。

興味深いのは戦後の舞台芸術をリードしてきたイギリスとアメリカが参加していない。理由は定かでないが、東西冷戦の影響が考えられる。

第1回目から以下のセッションが設けられていた。

- ナショナルセッション (各国現役美術家作品の展示)
- 劇場建築セッション
- テーマセッション 第1回目は没後180年を記念して【モーツァルトのオペラ作品】
- チェコスロバキアセッション (第1回～第6回まで) 各セッションの優秀作品にゴールドメダル、シルバーメダルの他に最優秀国にゴールドトリガという賞が与えられている。第1回はフランスが獲得。

この時期の展示内容はデザイン画が中心で、模型や舞台写真もあまり見あたらない。一般的な絵画の展覧会に近いものであったろう。

◇第2回 1971年は「プラハの春事件」もまだ生々しい主催国として厳しい状況の開催であったが、参加国は26ヶ国に増えている。

キューバ/イギリス/ハンガリー/ノルウェー/ルーマニア/スペイン/スウェーデン/ウルグアイ/ヴェネズエラが新たに加わっているが、1回目に参加していたアフリカ、オセアニアの国々の名前はなし。中近東の国の参加もない中、アジアからの参加は日本だけで、極東から遥々参加した我が国の舞台美術や演劇に対する仕事を高く評価している。23名の舞台美術家やコスチュームデザイナーの作品が送られ、おそらくヨーロッパにおける初めての大規模な日本の舞台美術家達の作品展示であったろう。第1回から第7回の記録をまとめた「A

MIRROR OF WORLD THEATRE」に2頁に渡って日本の4人の作品が紹介されている。どれも『ロミオとジュリエット』で、この回のテーマセッションが【シェイクスピア作品】であったためだろうが、欧州の人達が東洋でどのようにシェイクスピア作品が上演されているかと、大いに興味をもっていることが窺い知れる。

この時日本は団体賞の2位を受賞している。

◇第3回はPQ75になるわけだが、実際には76年1月に開催された。「プラハの春事件」以後の政治情勢の不安定の中で開催が遅れた。

参加28ヶ国、欧州からデンマーク、オランダが初参加の他、ここにきて漸くアメリカが参加。アフリカ、オセアニアからの参加はなく、アジアからは日本のみである。コスチュームデザインで河盛成夫が、ゴーリキーの『どん底』の衣裳でゴールドメダルを受賞。この回あたりから展示内容がデザイン画を中心とするものから、上演写真や凝った模型作品が多く見られるよう変化してきた。

テーマセッションは【ステージデザインスクール】学校部門の初めての展覧会であったが、舞台美術やコスチュームデザインを専門に学べる学校が当時それほど多しはずもなく、実際にはチェコスロバキアを中心とする近隣諸国の学校の他にファインアートのジャンルやパフォーマンスの他、建築の学校などが参加している。

この時関西からの出品者は板坂晋治、西村恭子、阪本雅信(当時3人はテレビ局の美術部勤務)らが初めてプラハに赴き、日本大使館でのパーティの席上、盛んに各国の関係者から舞台美術を教える大学の教員がここには来ていないのか?と質問されたと聞く。東京からは武蔵野美術大学の元教授高田一郎が参加していたが、関西からは未だなかった。大阪芸術大学に舞台美術学科が誕生して、2年に満たない頃である。プラハに赴き舞台美術教育の重要性に気付いた先の3人はその後、次々に大阪芸術大学で教鞭を取ることとなる。

◇第4回 1979年開催参加25ヶ国で前回より減少していて、この国際展の伸び悩みを示しているが、それを改

造再建するために第3回のテーマセクションであった「ステージデザインスクールセクション」を常設。この学校部門に日本側から武蔵野美術大学、多摩芸術学園(現、多摩美術大学)が出品している。この回には舞台芸術学科の教授であった田中照三が出品し、PQにも出かけて、当時筆者は学生で展覧会の前衛的な作品の話をして頂いたのを覚えている。

1979年チェコスロバキアの政治情勢はまだ不安定で、劇作家ヴァーツラフ・ハヴェルが「違法拘留者を守る会」を結成した為に投獄されている。しかし、10年後の彼は民衆に推されて大統領となっている。チェコスロバキアは70年代から80年代にかけて暗く厳しい時代でPQの開催を続けることは容易ではなかった。

日本側から28名もの出品者の他にテーマセクションは【PUPPETS】つまり人形劇で、人形劇作家10名の作品も出展、各国の人形劇の記録が掲載されている。

チェコスロバキアには1000を越える人形劇団があるという。この国ならではのテーマだろう。

◇第5回 PQ'83では27ヶ国の中、初参加のエジプト／フィリピン／ベトナムが登場している。

テーマセクションは【チェコスロバキアの舞台美術家によるミュージカルドラマ作品】日本は団体賞の名誉賞受賞の他、岡島茂夫がシルバーメダルを受けている。学校部門は前回に引き続き武蔵野美術大学、多摩芸術学園が出品。

この80年代最初のPQについて高田一郎(現、舞台美術家協会理事長)は世界の舞台美術が確実に変化していることを「劇空間のデザイン」で報告している。

70年代とは違う動き、展示作品の変化、模型舞台を主にして、絵画表現や写真のパネルは補助的に使う方向に移り、プロセニウム・アーチを額縁とし、絵画表現による平面的な舞台装置は影が薄くなり、立体造形を演劇空間に結びつける作業が増えている。現代の舞台美術家は舞台の額縁から離れ、自由な空間を求めている。従来の方法にとらわれず柔軟な発想による演劇空間、その意欲的な例がゴールデン・トリガを受賞した西ドイツで、展示場は草原になっていて、小道を歩きながら、点在する

模型を觀賞する。その模型のひとつ、ヤナーチェクのオペラ「カーチャ・カバノヴァ」の装置が、そのまま展示会場に置き換えられていることに気付く。ベンチで休むことも出来て、従来の常識を破ったユニークな展示であったことを伝えている。

PQ'83の特に西ドイツの展示はその後のPQの各国の展示に大きな影響を及ぼしたに違いない。それまで絵画作品、模型作品を眺める展示から、舞台上にあがった登場人物のような気にさせてしまう展示方法へ、体験型展示の登場である。

折しもこの頃、正確には1982年10月からロンドン、ウィンターガーデンシアターで『キャッツ』が上演され、その演劇空間が話題を呼んでいた。日本でも劇団四季が各地で特設テントを造り、ロングランの公演を成功させている。ロンドンでの初演の後、アメリカ・ブロードウェイへ渡り17年にも及ぶロングランになり、20世紀後半のミュージカルの代表作となったのも、歌やダンスの要素もさることながら、『キャッツ』独自の劇空間の力によるところも大きいだろう。

その『キャッツ』も今年、20世紀と共に幕が下ろされる。80年代に入って舞台芸術の世界は大きく変化し始めていた。

◇第6回 PQ'87は、参加32ヶ国にまで増えている。中国が初出展したほかにカンボジア／ラオス／アイスランド／スペインーカタロニア地方の参加がある。

テーマセクションは【チェーホフの作品】、ソビエトがこのテーマ部門でゴールドメダルを受賞していて、北欧らしい雰囲気を漂わせる白い格子のパーティーションで上演作品を展示しているほか、ナショナルセクションではアメリカが舞台美術家の仕事場のその雑多な空間を生み出し、初のゴールドトリガの栄誉を与えられている。日本からは24名の出品がある他、劇場建築セクションに日本劇場技術協会から出展、スクールセクションは武蔵野美術大学だけとなっている。関西からの出品者は3名だが、その中に大阪芸大舞台芸術学科出身の加藤登美子がいる。彼女は当時現地にも行っており、PQ'87の印刷物を見せてもらおうと、パンフレットの地味さ、紙の質

の悪さに気付く。この時期チェコスロバキアはビロード革命^{注2}の2年前であった。

◇第7回 PQ'91には主催国チェコスロバキアは大きく変化している。1989年のビロード革命で社会主義は崩れ、劇作家のヴァーツラフ・ハヴェルが大統領に就任。激動の中、開催が危ぶまれた時期も多々あったが90年代のPQの幕は上がった。

参加36ヶ国、キプロス／韓国／シリア／香港が初参加。テーマセクションは再び【モーツァルトのオペラ】が取り上げられ、世界中で上演され続けるモーツァルトの代表的なオペラが上演写真、模型、実物の衣裳の展示の他にインスタレーションなど多種多様で、20年余りを経て展示方法は大きく様変わりしている。会場はこの時だけは「文化宮殿」という社会主義国時代の現代建築の複合施設で開催され、日本は其中で木材を使い、日本の民家を思わせる2階建ての展示会場をこしらえている。出品者はなんと79名にも及んでいるが、これはTV局の美術デザイナーが多数参加したためだ。学生部門は武蔵野美術大学、多摩美術大学が参加。

この2年後チェコスロバキア共和国はチェコとスロバキアに分離している。

◇第8回 PQ'95にはプラハはチェコ共和国の首都として蘇って、PQ会場も第1回目からのヴィスタヴィスチェ・産業宮殿に戻り、華やかに開催された。参加は一気に46ヶ国にふくれあがり、ソ連の名は消えロシア／エストニア／リトアニア／クロアチア／スロベニア／ベラルーシ／シリア／モンゴル／そして隣国となったスロバキアが新しい名前として加わった。

この95年のPQでは日本側の事務局、展示スタッフの他に参加校の学生も希望を募って総勢70名、うち学生は30名あまりが渡航している。大阪芸術大学も初出品し、4名の学生が参加した。

テーマセクションは【ヨゼフ・スヴォヴォダの舞台美術】で、彼のプランの数々が展示され、その舞台美術の思考に大いに刺激を受けて学生は帰国した。ナショナルセクションでの日本ブースはこの時、仕込みに3日をか

けて相撲の土俵を造り、話題となった。この日本のすがすがしい作品と展示に対して審査員特別賞を与えられている。最高の賞であるゴールドトリガはブラジルが受賞。

また興味深いところでは1992年のバルセロナオリンピックのオープニングを飾った衣裳デザインに対し、スペインの3人のデザイナーがゴールドメダルを受けている。その他の賞で出版部門も設けられていて、舞台美術や劇場技術の本の出版促進に一役買っている。出版部門の受賞の中には「ハンガリーのPQ用カタログ」がシルバーメダルを受けているが、その理由は次のようなものである。「これは3ヶ国語によるもので、現代舞台美術を記録することに関する優れた例である。」店頭に並ぶ本だけでなく、各国が無料で配布するカタログにまで対象を広げているのはPQならではであろう。

さてスクールセクションには26ヶ国61校の参加があり、日本からは武蔵野美術大学／多摩美術大学／日本大学／玉川大学、そして大阪芸術大学が初参加したわけだが、第4回から出品している武蔵野美術大学から比べると16年も遅れての参加であった。スクールセクションの情報が永らく東京に片寄っていて、大阪芸術大学に知らされずにいた。

話がそれるが、83年から2年おきに日本と中国の「演劇美術教育作品展」という舞台美術を学ぶ学生達の展覧会が幹事校の武蔵野美術大学空間演出デザイン学科を中心に日本大学芸術学部演劇科、多摩美術大学映像演劇学科で開催され、第2回目から大阪芸術大学も参加している。2年に1度これら演劇空間を教育する各大学の交流があったにもかかわらず、PQの学生部門の情報は我校へは届かず、板坂晋治がPQ'91で他大学の出品を知り、次回から参加する意志を伝えた経緯がある。なお舞台芸術学科からはシアター・ドラマシティでの学外公演の『夏の夜の夢』を中心にデザイン画の他、衣裳も展示した。

PQ'99については後に詳しく説明する。

Q5 なぜチェコ、プラハで開催されるのか？

◆チェコで開催される要因について

もともと舞台芸術が盛んな国柄であったが、1936年の

ミラノ・トリエンナーレで当時のチェコを代表する3人の舞台美術家が応用芸術の部門で主たる賞を受賞して大成功を収め、翌1937年パリの国際博覧会では更に世界的な成功を収めた。1957年にはサンパウロ・ビエンナーレで優れたチェコスロバキアの芸術家が現れ、彼らは1959年～1965年の演劇部門の主だった賞を総なめにした。1958年には【ラテルナ・マギカ】がブリュッセル万博のチェコスロバキア館で初上演し、驚異と話題的となっていた。チェコスロバキアの舞台デザインの成功が余りにも異例で、フランチェスク・トロスター、ヨゼフ・スヴォボダといった卓越した才能の舞台美術家が現れたために、サンパウロ・ビエンナーレの制度にのっとり、更に舞台芸術の特性にこだわって、プラハ・カドリエンナーレが1967年に設立された。また世界的に認められるヨゼフ・スヴォボダは当時プラハ国立劇場の芸術技術最高責任者であったし、すでにチェコでは指導者としても活躍、彼の存在がPQ開催に大きくものを言ったことは間違いなく、演劇組織が国有化されていたので、「プラハの春」の民主化に乗った国をあげての取り組みであった。

このような条件が重なり合って、1967年プラハ・カドリエンナーレの幕は開いた。

Q6 ヨゼフ・スヴォボダとは？

◆ヨゼフ・スヴォボダについて

20世紀を代表する舞台美術家。

1920年チェコスロバキア、ボヘミア地方生まれ。

1950年からプラハ国立劇場の芸術技術監督を勤め、

1969-89年母校プラハ産業芸術大学の教授。

1970-1979年プラハ国立劇場主任美術デザイナー。

【ラテルナ・マギカ】をブリュッセル万博、モントリオール万博で上演、大成功を納める。チェコ本国を中心としながら海外のあらゆる種類の劇場も含め700作ほどの美術を制作している。有名な劇場、映画監督との協力も数多く、劇場の技術面に関して幾多のpatentを所持しているほか、世界各国の受賞もある。舞台美術家として名が知られているが、舞台照明家でもあった。プラハ国立劇場では美術だけでなく、舞台照明や舞台機構の技術を

含む最高責任者であり、その為に常に照明効果を生かした舞台装置を考えていて、「光の魔術師」「空間と光の詩人」とも呼ばれている。チェコ・アバンギャルド演劇の伝統を踏まえた、オペラ、バレエ、ドラマのジャンルの舞台空間の処理は、作品への創造的解読力の卓抜さにより、世界の驚異となる。舞台美術の他にテレビ、映画作品もある。

彼の舞台美術を日本で見ることはままならないが、映画『アマデウス』のオペラシーンの美術をスヴォボダがデザインしている。PQ'99でも3人の美術家との特別講演があり、講演後、スヴォボダが1947年に手がけたオペラ『トスカ』が上演された。単に舞台美術家として記録されるだけでなく、演劇の歴史を振り返る時、20世紀を代表する舞台美術家であり、演劇人として記録される人物であろう。スヴォボダについては紙面の都合上、別の機会に詳しく報告したい。



スヴォボダのデザイン「ラインの黄金」1988
「JOSEF SVOBODA」UNION OF THE THEATRE OF EUROPEから

Q7 ラテルナ・マギカとは？

A 端的に述べると「映像と演技者が共演するパフォーマンス集団」1958年万博で初演。その後プラハに常設の劇場を設け、実験的即興劇を映像などマルチメディアを駆使して上演する方法はチェコ・プラハ名物となっている。

Q8 第9回 PQ'1999 の開催期間は？

A 開催期間 1999年6月7日～6月27日

Q9 場所と会場は？

A 世界遺産の旧市街からヴルタヴァ川が大きくカーブするストロモフカ公園に隣接した、[ヴィスタヴィスチェ]日本語では産業宮殿。1891年「ボヘミア王国安息年博覧会」の為に建設された鉄とガラスで出来たアールヌーボー様式の趣のある建物で、これを取り巻く一帯にスポーツ施設や野外劇場、移動遊園地などがあり、PQでも前庭や野外劇場で催しが開かれた。また、サイドプログラムの会場は市街の劇場やギャラリー、学校などで催された。



PQ会場「産業宮殿」正面



PQ会場裏手、産業宮殿奥の公園から見る催し

Q10 今回の参加国は？

A アルゼンチン/オーストラリア/オーストリア/ベラルーシ/ベルギー/ブラジル/ブルガリア/カナダ/チリ/中国/クロアチア/キューバ/キプロス/チェコ/デンマーク/エジプト/エストニア/フィンランド/フランス/ドイツ/イギリス/香港/ハンガリー/アイ

スランド/イスラエル/イタリア/日本/ラトビア/リトアニア/メキシコ/オランダ/ニュージーランド/ノルウェー/ポーランド/ポルトガル/韓国/南アフリカ/ルーマニア/ロシア/スロベニア/スペイン-カタロニア/スウェーデン/スイス/シリア/アメリカ/ユーゴスラビア/以上47ヶ国地域別に見て、欧州29ヶ国、南米3ヶ国、北米3ヶ国、アジア4ヶ国、アフリカ2ヶ国、オセアニア2ヶ国となる。前回からは1ヶ国が増えているだけだが、規模的には今回が最大規模のものだろう。

Q11 今回のプログラムは？

- I ナショナルセクション〈ステージ&コスチュームデザイン〉
- II テーマセクション〈舞台美術へのオマージュ〉
- III 劇場建築セクション〈3000年への劇場〉
- IV スクールセクション
- V OISTAT 劇場建築コンペティション
- VI チェコ劇場の写真展
- VII ライトラボ [スタジオとフォーラムとラボ]

この他に

- ◆子供のための PQ コーナー
- ◆ブックショップコーナー
- ◆Le Campement 屋外テントコーナー

期間中毎日催されるメニューがあり、これらは大きく EXHIBITION/LIGHT LAB/LE CAMPEMENT/OTHERS /と4つに分かれて展示だけでなく、別会場で催されるサイドプログラムも多数ある。

EXHIBITION ではナショナル・デイと呼ばれる時間が、参加国に1時間ずつ与えられていて、各国デザイナーの交流の場が繰り広げられる。

LIGHT LAB では毎日スタジオ、ファーム、ラボに分類され、パフォーマンスやエジプトやベルギーのグループによるワーク・ショップ、新しい照明器具のプレゼンテーションなど盛り沢山なメニューがあった。

テント会場では約4つのフランスの劇団やサーカス団による催しが、ほぼ毎日夕刻から夜遅くまで上演されていた。

◇OISTAT サイドプログラム

アメリカの照明家ジェニファー・ティプトンによるワシントンで上演された「トロイアの女たち」の照明デザインプロセスについて。

チェコの衣裳デザイナー、シモーナ・リバコーヴァによる「デザインの技法と衣裳製作について」をプラハの劇場の衣裳工房を案内して解説。

舞台美術家デズモンド・ヒーリーによる「デザインを学ぶ学生の為のワーク・ショップ」の他にチェコに残る中世の劇場見学ツアーなどが開かれた。

しかし、実のところ初めて体験するPQのこのメニューを詳しく見て行動する余裕が、残念なことに我々にはなかった。これらのイベントについてはPQ会場に着いて初めて知ることばかりであった。

Q12 今回、日本からの参加者は？

A ナショナルセクションに出品者 16 名
舞台美術家協会 PQ 実行委員会によるツアー参加者
日本側コミッショナー／大田創 ほか協会員 17 名
スクールセクション側から
武蔵野美術大学／教員 5 名＋学生 15 名
多摩美術大学／教員 1 名＋学生 12 名
玉川大学／教員 2 名＋学生 11 名
以上が協会 PQ ツアー参加であるが、大阪芸大メンバーは関西発の独自のツアーを組んで現地会場で合流した。
大阪芸術大学／教員 1 名＋学生 9 名＋OB5 名＋協会関西支部員 2 名も賛助参加。
総勢 81 名が PQ 開催に赴いた他、海外研修員も留学先から駆けつけた。

◇ナショナルセクションについて

ナショナルセクションはPQのメイン展示である。各国を代表する舞台美術家やコスチュームデザイナーの作品が様々な形で展示される。原則として、過去5年間の作品に限られていて、300人を越える美術家が参加。

PQ全体を見ると47ヶ国であるが、今回ナショナルセクションの展示は37ヶ国、つまりスクールセクションのみの参加国もある。

広い産業宮殿のほぼ半分のエリアを使い、各国の展示スペースはまちまち、各国事情によって必要面積を買うことになる。日本は標準サイズと言ってよいと思うが、10m×8mのスペース、今回最大規模はオランダ、10m×16mの敷地に盛り沢山の展示、他を圧倒する意気込みで、対して5m×4mほどのスペースに目一杯詰め込んだイスラエル、2階建てブースのスロベニアなどが目立っていた。

展示内容は国によって、何人もの作品を展示する所もあれば、たった一人のデザイナーの作品で展開する国もあり、また一見するとどこが舞台美術なのか？まるで舞台美術を感じさせないニュージーランド、ノルウェーはコンセプチュアルな展示で気になるブースとなっていた。他に内乱のユーゴスラビアは苦勞してPQ入りし、舞台写真を中心に展示していた。ルーマニアは血のついた衣裳や小道具を置いて、ドラキュラの国を彷彿とさせていたが、これらの国に混じって、今回印象に残って日本の関係者の間でも評判の良かったのは、イスラエルやスペインのほか、小国ベラルーシやブルガリアであった。ベラルーシもブルガリアも模型作品は秀逸で、それは舞台模型の域を超えて、まるでオブジェかファインアートの作品のような出来映えで、見るものを捕えて脳裏にしっかり焼き付かせてしまった。これらの国々の演劇舞台情報はまず日本では聞くことも見ることもないために、その舞台芸術の水準の高さに驚かされた。

このようなPQのオープニング後、オペラ大国イタリアのブースにはまだなにも飾られていなかったし、中国はオープニング当日、わずかなスタッフで展示していた。

運送面において有利な為か、欧州諸国は大がかりな展示が多く、準備日数もそれぞれ違う。また模型や実際の装置の材料が国によって違うことに気付く。ベラルーシやブルガリアは鉄や金属を巧みに使ったものが多く見られた。模型には海外の作品には人物も登場させているが、日本の美術家の作品にほとんどそれは見られない。

展示以外に各国ブースによっては、無料でパンフレットやポスターやはがきが配布されたりする。日本も8ページの小冊子を配布していたが、中でも最も手の凝ったのはスロベニアで、ダブルリングのパンフレットを製作

していた。これらの無料配布資料についてはオープニング後すぐ無くなるものが多く、学生達も熱心に集めていた。この資料だけでも実に貴重なものが多く、その国の文化の高さが窺える。



チェコブース入口、若手デザイナー達が数週間を要して、大がかりな機会仕掛けを使って展示。迷路の奥にモニターテレビの頭人間が舞台映像を映し出していた。開催国ならではの凝り様。



オランダ、最大規模のブース壁面、ダンボールの小屋があったり、中央に高い照明塔があったり、数分ごとに音の鳴る装置は、会場中に響かせていた。



ドイツは1人の作家Achim Freyerの作品を12台のモニターテレビで、ヘッドホンをつけて観るよう客席を設営。



ブラジルは一面黒の世界、それもゴミ山のイメージの中に作品を置いて、挑発的な空間を生み出していた。



イギリスは22名が参加。絵はポール・ブラウンによる「キング・アーサー」



「EVERYTHING SCREAMS」と題し、始終女性の悲鳴が鳴り響き、暗い空間の中に女性の人形が宙に浮いていたり、テレビが語りかけていた。Deggeller Marc氏1人の作品展開。スイスブース外観と内。



日本ブース、約8時間での仕込み。16名の作品展示。



スロベニアは2階建てブース、兎人形が揺り椅子を動かす。



ナショナルセクション・アメリカ
THE WORLD OF DESIGN と銘打って展示。



ベラルーシの模型作品。



テーマセクション・ブラジル 大野一雄の写真もパネル化していた。



学生に最も人気の高かったイスラエルのコスチューム、模型はベースの足を学生ブースと統一していた。



テーマセクション・ポーランド 電動で登場人物が一周。



苦勞してPQ出展出来た、ユーゴスラビアの野外での上演写真。



劇場セクション・ポーランドの模型作品。

◇テーマセクション【舞台美術へのオマージュ】

フィンランド/エストニア/エジプト/ドイツ/韓国/中国/チェコ/ベラルーシ/デンマーク/ブラジル/ユーゴスラビア/リトアニア/ハンガリー/イスラエル/チリ/イギリス/スロヴァキア/ロシア/ポーランド/これら19ヶ国の代表的な舞台美術家に絞った作品を中心に展示され、歴史的な作品が数多く見られた。

ポーランドは大がかりな回転装置で登場人物の実物大の人形を据えて、実際の舞台装置に近づけていた。

テーマセクションは産業宮殿の中央、最も天井の高いエリアで、吹き抜けの周囲2階にはチェコの劇場写真の展示もされていた。

イギリスは「Ralph Koltaiの舞台美術」を別会場、旧市街Gallery Manesで開催。期間もPQより長く催され、これには足を運ぶことが出来た。

◇劇場建築セクション

ブラジル/チェコ/中国/エジプト/ドイツ/韓国/カナダ/ユーゴスラビア/スウェーデン/スペイン-カタロニア/スロヴァキア/ロシア/ポーランド/オランダ/14ヶ国がサードミレニアムのための劇場建築と題して展示。

エジプトやブラジルなどの新しい劇場が模型や写真、図面で紹介される中、目を引いていたのはポーランドの展示で、ほぼ全てを模型作品で紹介。斬新な角度で模型を見せて効果をあげていた。

また今回「第5回 OI STAT 建築設計競技」入選第1位から9位までの作品と優秀賞6作品が展示された。

プラハにある既存施設を含む具体的な敷地をテーマにした設計競技で、応募数は世界30ヶ国226作品。

審査の評価基準は以下

- ①新しい劇場としての可能性
- ②都市計画的な視点
- ③劇場としての機能の整備
- ④劇場空間のデザイン
- ⑤外観のデザイン
- ⑥プレゼンテーション

日本からの参加作品が4位と優秀賞の3位に選ばれ、更に2つの作品が展示とカタログに掲載された。

◇スクールセクション 30ヶ国106校

今回は30ヶ国からの参加で学校数はなんと106校にも上り、今やナショナルセクションと対極をなしていると言っても過言でない勢いであった。

我々は東京からの参加校のメンバーと合流し、4m²ほどのブースに4大学の参加者約60名がひしめき合いながら展示作業を敢行した。しかし、もっと熱気があったのは韓国で、今回はナショナル、テーマ、スクールの3部門に国をあげての参加、総勢100名を越えて、並々ならぬ力の入れようは展示作業の最中にもよく伝わってきた。

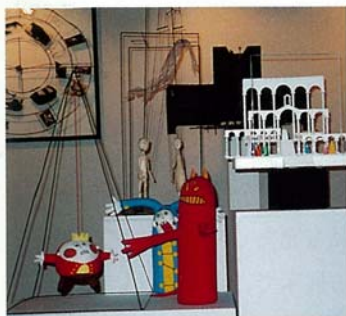
スクールセクションはまだ勉強中の学生の作品が飾られるわけだが、完成されていない未完の部分にこそ魅力を秘めている。

このスクールセクションでも大変質の高い作品を見せてくれたのは、小国ラトビア、ベラルーシ、ポーランド、ブルガリア、ルーマニアなど。ポーランドは見事な舞台衣装を持ち込み、模型作品も充実していた。ブルガリアは学生らしい好感のもてる展示で、東欧らしい人形劇の作品も見られた。インスタレーションとして成功していたと思えるのはルーマニアで、ニット素材の衣裳で空間をうまく捉えていた。チェコはプラスチック素材の等身大の人形が宙に浮いていたり、テーマ性を持っていた。

フランスはスクールセクションのみの参加で、足付きの箱に学生のスケッチブックやファイル、モニターテレビがあったり、気負った展覧会用の作品を出品するのではなく、日頃の成果を展示。その他、イスラエルは模型作品を中心に展開、巨大な屋外舞台装置の模型は他を圧倒していた。そうかと思えば、紙で仕上げていたエリザベス朝時代の衣裳があったり、教育の質の高さが窺える。メキシコは広いブースを確保して、スクールセクションだけに出席。大国アメリカは最も多い30校の絵や写真をモデリングボードに貼り付けただけの低コスト展示。イギリスは16校で、質の高い模型や人形、有りとあらゆるものが詰め込まれたドアを開けると、動きだすもの、音が鳴り出すもの、ビデオが語っていたりする。



力作ぞろいのイスラエル、野外上演の大模型。(テルアビブ大学)



ベラルーシの模型作品。



学生展示作業中の日本ブース。



ルーマニア、写真を巧みにつかっのインスタレーション。



オーストラリア、赤い人形が壁面を歩いて中央の山に到着。



16校が各1m幅位のロッカー形式にぎっしり作品を、人形は1校の1部分。



フランス、人の足を型どった上にBOX各種。



ポーランドのブース、コスチュームが印象的。

今回モニターテレビやパソコンを利用する国が多数見られた他に、PQ用の興味深い印刷物を用意している国、学校が多くあった。

Q14 PQ' 99の各受賞の結果は？

A 【ゴールド・トリガ】最優秀展示賞 チェコ共和国
【ゴールドメダル】

舞台美術/Jaume Plensa とその仲間 (スペイン)

舞台衣裳/Jana Preková (チェコ)

舞台衣裳/Joan Guillén (スペイン)

劇場建築部門/実際に施工された劇場 (ブラジル)

テーマセクション/Achim Freyer (ドイツ)

【優秀賞】

舞台美術/Jon Berrondo (スペイン)

Paul Brown/Stefanos Lazaridis (イギリス)

舞台衣裳/Rakefet Levy (イスラエル)

Elżbieta Terlikowka (ポーランド)

【ユネスコ賞】

ナショナルセクション新人賞

Vladimír Anšon (エストニア)

Liz Ascroft (イギリス)

ニュージーランドのデザイナー達

スクールセクション/オランダ・イギリス・ラトヴィア

テルアビブ大学・韓国国立大学

Q15 参加の目的、意義は？

A 大阪芸術大学舞台芸術学科美術コースは演劇を中心とする舞台美術デザインにこだわり続けている。その事を日本から参加する他大学の作品と比較研究すると共に、海外へ広くアピールしたいと考えている。現地へ学生と赴き、PQに触れることは世界の舞台芸術の一側面ではあるが、多種多様な劇空間の創られかた、発想、独創性に刺激を受け、またPQに行かなければ見ることの出来ない国々の作品に触れて、改めて日本の文化を見直すことに繋がる。

Q16 今回の成果は？

A 日本にははまず手に入れる事の出来ない多くの舞

台美術の情報を入手でき、あらゆる面で良い刺激を受けたこと。学生の卒業作品に、特に模型製作に良い影響を与え、卒業制作にさっそく取り入れた学生がいた。

また、学生全員がプラハ国立劇場でオペラ「アッシャー家の崩壊」を見たことは彼らの大きな財産になったことと思われる。本場の古典的劇場で観賞するオペラは舞台美術もさることながら、観客席の雰囲気を感じられ、文化を知る上でもっとも良い経験のひとつであろう。

また、他大学や他国の人に混じって学生が、展示作業出来たことも良かった。プロフェッショナルの作業を目にしなが、まるでスタッフのように作業するのは活気に満ちていたし、今回コミッショナーの大田創が大阪芸術大学で教えていることもあり、ナショナルセクションの日本ブースでは我が校の学生は大いに活躍してくれた。そしてプラハという世界遺産の街で歴史的建造物に触れながら、街に数多く点在する劇場でマリオネットやバレエを観たり、わずかの日数だったが、実に沢山の演目を学生たちは観ることが出来た。舞台芸術が市民の生活に浸透しており、日本と比べチケットが安いことも幸いした。

舞台美術を学ぶ各国の学生作品に触れ、また交流することの刺激は、将来創作の仕事に入る為の基礎、あるいは入ってから基盤となることだろう。

Q17 今回の問題点は？

A 日本のスクールセクションブースの見直し。参加大学出品作品のテーマ性の違い、展示方法をもっと見直し、交流時間をもっと取る必要があった。

各国ブースの多くがPQ用に印刷物を用意していた。我々は大学のパンフレットを持ち込んだが、一瞬の間になくなり、問い合わせもあった。次回はPQ用に工夫された印刷物を用意すべきであろう。

PQプログラムが事前に入手出来なかったために、サイドプログラムの多くを体験出来なかった。これには通訳の必要性もあるだろう。要するにプラハ滞在日数が足りなかったことがあげられる。我々は6月5日～10日のわずか5日間のプラハ滞在であった。

Q18 今後の展望は？

A 大阪芸術大学、舞台芸術学科の存在をもっとアピールできる作品を持ち込む。授業の一貫として多くの学生が参加出来るような計画を望む。他大学の中には授業として参加、1週間という決められたスケジュールで毎日の予定をこなしている学校もあった。参加の他大学との交流を持ち、学生達の意識の向上を計る。

◆おわりに

初めて体験する PQ の会場を国ごとにぐるっと見て回るにも、作品の一点一点の内容、つまり戯曲の名前や作者、ミュージカルなのかストレートプレイなのか、オペラなのかを見極めて巡回しようものなら、何日通うはめになるか解らない規模であった。展示会場には常に効果音や音楽が何処かしらのブースから流れ、多くのモニターテレビで視覚と共に聴覚を刺激し続けていた。

展示だけでなく、サイドプログラムは世界各国のデザイナーのワークショップや郊外の劇場視察、野外テントのサーカスやイベント、ライトラボの照明の実験劇場など、もはや舞台美術だけの PQ ではなかった。

今回は私の担当する舞台美術コースの学生や OB で参加したが、照明や演出を学ぶ者や関係者も存分に楽しむことの出来る、是非とも体験してもらいたい PQ であった。

舞台美術家フォーラムでも、ポーランドのアダム・キリアンは「演出家と舞台美術家との共同作業は非常に重要なことで、演出家は船の船長であると思っている。優秀な演出家は世界から PQ に招かれるべきだ。」と語っている。イギリスのラルフ・コルタイは「舞台美術家は共通の目的を持って連帯すべきで、一緒に何かする時は喜んでします。これが政治家の集まりであったらどうか？」と述べ、イギリスのパメラ・ハワードは「私達と同じようなことが出来る組織は世界中探してもどこにもありません」と、共同作業の中で創りあげる舞台美術家ならではの発言で、政治的な軋轢がこの展覧会にはなく、多くの国を代表するデザイナーや関係者がこのイベントに誇りをもって参加している。

元劇作家のチェコ大統領は「演劇はつねに時代の精神

的な中心にあらねばならない」と語った。果たして日本の演劇がそうであるか疑問である。しかし、もっと舞台芸術を楽しむ日本文化を育てる必要性を強く感じた。この点においてはまだまだ我が国は貧しくないだろうか？

舞台美術のオリンピックと呼ぶ人もいるが、47ヶ国では、まだまだ舞台に親しめる余裕のない国々も数多く存在するというので、その国の舞台芸術を見れば文化の高さも知れる。より多くの国の参加を願う。

参加学生からレポート提出をしてもらったが、皆一様にその規模の大きさと楽しさ、舞台芸術や音楽会、美術が庶民のものであるプラハの街に強く惹かれて、次回の PQ にも是非行きたいと思う学生が多くいたことに驚いている。次回も良い作品を送れるように今から準備を進める必要があるが、参加する他大学とテーマを持って協力しあうことも大切だ。

この報告を書くにあたり御指導頂きました、恩師である田中照三元教授をはじめ、板坂晋治元教授、阪本雅信先生、過去の資料や写真の協力をして頂いた加藤登美子さん、また我々と PQ への旅に同行し、学生の面倒も見て下さった、よみうりテレビの綿谷登氏には大変お世話になりましたこと、深謝申し上げます。

注 1 International Organization of Scenographers, Theatre Technicians & Architects の略称

注 2 1989年の流血なき民主革命

引用・参考文献

- 「A MIRROR OF WORLD」VĚRA PTÁČKOVÁ 著 1995
THEATRE INSTITUTE PRAGUE
- 「IN SEARCE OF LIGHT」1995
THEATRE INSTITUTE PRAGUE
- 「JOSEF SVOBODA」UNION OF THE THEATRE OF EUROPE/FOUNDER GIORGIO STREHLER 著 1999
- 「OPERA」'99 LÉTO/STÁTNÍ OPERA PRAHA 1999
- 「PQ 公式カタログ」'87/'95/'99 版
- 「劇空間のデザイン」リポート/OISTAT 編 1984
- 「アドルフ・アピア」相模書房/遠山静雄著 1977
- 「演劇の歴史」朝日出版社/フィリス・ハートル著 1984
- 「STEGE DESIGN TEROUT THE WORLD SINCE 1935」1956
- 「STEGE DESIGN TEROUT THE WORLD SINCE 1950」1964

INTERNATIONAL THEATRE INSTITUTE

「タビト6・ブラハ」 「ワールドアトラス」 1995 同朋舎出版
「ステージ&テレビジョンデザイン」 No.3 / 1984 / No.4 / 1989
「日本舞台美術家協会 創立30周年記念誌 '88」 1988
日本舞台テレビ美術家協会編
「世界大百科事典」 平凡社 1988
「日本大百科事典」 小学館 1987
「ブラハ建築の森」 学芸出版社／田中充子著 1999
<http://www.hinix.com/oistat/>